

【神を畏れぬ人々】

▼11節から、順に読みます。

『婦人たちが行き着かないうちに、数人の番兵は都に帰り、この出来事をすべて祭司長たちに報告した』。

『この出来事』とは、二人のマリアがイエスさまの埋葬された墓に出かけて、天使に遭遇したこと、更には復活のイエスさま本人にあったということです。そうしますと、この表現には、実に不思議な意味が込められていることになります。

▼先ず、『婦人たちが行き着かないうちに』つまり、二人のマリアたちよりも早く、『番兵は都に帰り』『この出来事を』『報告した』とあります。

復活の出来事を、誰よりも早く、都イスラエルに伝えたのは、番兵たちなのです。その後のキリスト教の歴史は2000年以上重ねられています。その歴史とは、『イエスは十字架に架けられたが復活した』、『だからこそ、イエスはキリストである』、『私たち人間の救いはただイエス・キリストにかかっている』という宣教の歴史です。

そのまことに記念すべき、最初のメッセンジャーは、イエスさまの墓を見張っていた番兵たちなのです。

弟子たちでもなく、マリアを初めとする女たちでもなく、イエスさまの墓を見張っていた番兵たちなのです。

このことは、他の福音書とは内容が違います。違うだけに、マタイは意識して、このことを記しているのだらうと考えます。

つまり、最初のメッセンジャーは、イエスさまの墓を見張っていた番兵たちなのだという記述は、マタイのメッセージなのです。

▼そして、最初に、この出来事を聞いたのも、祭司長たちです。

弟子たちよりも早く、教会よりも早く、この出来事を、伝えた者がいたし、聞いた者がいたのです。

しかし、彼らはイエスさまを信じないし、その後に従うこともなかったのです。これはマタイのメッセージです。福音に触れた者が、皆、イエスさまを信じる訳ではないし、その後に従うこともないのです。

思い起こしてみれば、イエスさまの誕生をいち早く知ったのも、ヘロデであり、律法学者たちでした。しかし、彼らはイエスさまに会うどころか、ヘロデはイエスさまを殺そうとしたのです。

この記述はマタイ2章にあります。2章と28章は符合するのです。

▼『この出来事を全て』とは、直接的には、28章2～3節のことでしょうか。

『すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。

3:その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった』。

これだけの出来事を目撃した番兵たちが、4節のようになったのは、当然です。

『番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった』。

復活の出来事に遭遇した者が、『死人のようになった』というのは、これは、意味深です。極めて重要なことです。

人は復活の出来事に遭遇した時に、その出来事を知った時に、『恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようにな』るのです。

何となく、ほんわりと信じ、受け入れるような事柄ではありません。

ですから、これは私見かも知れませんが、復活の福音を、分かり易くほんわりと語り、理解して貰うなどという伝道はありえないと思います。

▼クリスマス、次はカーニバル、バレンタインデー、ハローウィン、これからはイースターだそうです。イースターのシンボルは何故かウサギです。聖書的根拠はありません。商業上の戦略です。イースターも日本に定着するかも知れませんが、しかし、これらはキリスト教を歪めただけで、福音宣教という観点で見れば、少しの貢献もありません。

それなのに、教会がこれらの墮落しきった祭りに追従するのは、愚かという表現さえ通り越しています。

▼結局、番兵たちの目撃談は、福音ではありません。番兵たちは、女たちよりも早く、この出来事を伝えましたが、それは、福音ではありません。

番兵たちは、あくまでも天使を見たのであって、復活の主に出会ったのではありません。勿論、そのことも、福音ではないと言う理由に数えられますが、それよりも何よりも、彼らは、イエスさまを救い主と信じてはいません。救い主と信じていない者は、福音を伝えることは出来ないのです。

彼らは、自分たちの見たことの全てを伝えました。全てとは、事実をとということかも知れませんが、しかし、それでも福音ではありません。

何故なら、信仰がないからです。全てを伝えたようであり、実は何も伝えていないのです。

▼このことも私たちに当て嵌めて考えなくてはならないことでしょう。私たちは何を語り何を伝えているのかということです。

『イエスは十字架に架けられたが復活した』、『だからこそ、イエスは基督である』、『私たち人間の救いはただイエス・キリストにかかっている』ということをお伝えしなければ、何も伝えたことにはなりません。

それは伝える対象が子どもだろうと、老人だろうと、同じです。相手が教養人だろうが、そうではなかろうが、同じです。

▼信仰とは、目では勿論ですが、自分の全存在で、主を受けとめ、感じ取り、それを、口では勿論ですが、自分の存在そのもので伝えることです。感動が、福音を宣べ伝えるのです。

彼らは恐怖を感じました。これは、感動の一步手前だったかも知れません。しかし、福音となるような感動には至っていないのです。

▼何故、これだけの出来事を見ていながら、彼らは、神さまの存在を感じ取ることが出来なかったのでしょうか。

彼らは、5節以下の天使のメッセージを聞いていません。

『天使は婦人たちに言った。「恐れることはない。

十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、

6:あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、

復活なさったのだ。』

事実を目撃したかどうか、決定的なことではありません。メッセージを聞かなくてはならないのです。

▼そして、彼らは、7節の天使の言葉も聞いていません。

[それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。

『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』確かに、あなたがたに伝えました。』

婦人たちは、この言葉を、この使命を与えられ、福音の使者となりましたが、番兵たちは、メッセンジャーとして派遣されていないのです。派遣されていない者が、メッセージを伝えることは出来ないのです。

▼さて、番兵たちの情報を、祭司長たちも長老たちも、確かに、聞きました。

『この出来事をすべて』です。何度も言いますが、正確な情報です。それは、確かに、祭司長たち、長老たちの心を揺り動かしたのです。但し、感動ではありません。悪意です。悪意、憎悪にうち震えたのです。

情報は、それが正しい情報であっても、人を感動させるとは限りません。むしろ、嫌悪感や憎悪を引き起こすことの方が多いかも知れません。

そして、この正しい筈の情報から生まれたのは、13～14節の捏造された情報、嘘です。

▼12節。

『そこで、祭司長たちは長老たちと集まって相談し、兵士たちに多額の金を与えて』

神さまのメッセージを聞いていない者は、聞こうとしない者は、自分たちで相談・協議するのです。

番兵たちの情報を、これは、確かにメッセージとは言えない、唯の情報かも知れませんが、天使が現れたという不思議を、何と、覆い隠し、歪めてしまうのです。天の情報を人間が相談して歪めてしまったのです。しかも、そのためには、お金を使ったのです。

相談すること、人間が知恵を出し合うことは、原則悪いことではないかも知れませんが、しかし、何もかもを、相談して、人間が知恵を出し合って決めることは出来ません。

そうしてはならないこともあるのです。

▼13～14節をご覧ください。

〔『弟子たちが夜中にやって来て、

我々の寝ている間に死体を盗んで行った』と言いなさい。

14:もしこのことが総督の耳に入っても、うまく総督を説得して、

あなたがたには心配をかけないようにしよう。』〕

これは、悪巧みです。『うまく総督を説得して、あなたがたには心配をけない』とか、巧いことを言っています。

しかし、兵士たちへの配慮といえれば配慮です。そうでなければ、まんまと死体を盗まれたことになって、兵士たちは咎められるでしょう。

▼祭司長、長老たちは、ここまで気が回るし、ある意味では、兵士たちへの優しい気配りと言えるかも知れません。

もしかしたら、兵士たちが無実の怠慢で咎められないように配慮したのは、祭司長、長老たちなりの正義感とさえ言えるかも知れません。

しかし、そもそもが嘘です。そして、結局、お金で事を処理しようとしています。

お金で、事実をも動かすことが出来ると考えているのです。

ユダにお金を渡したのも、祭司長です。同じ人物かどうかまでは書いてありませんが、書いていないということは、同一視して良いということでありましょう。

お金で、人の心をも動かすことが出来ると考えている人は、お金で、事実をも動かすことが出来ると考えているのです。

お金で人の心動かすのは、お金で心を動かされるよりも、もっと悪いことです。

▼さて、祭司長、長老たちは、何故こんなことをしたのかという問題です。

マタイだけでも、いろいろと上げられていますが、21章23節が、一番決定的なことではないかと思えます。

『イエスが神殿の境内に入って教えておられると、祭司長や民の長老たちが近寄って来て言った。「何の権威でこのようなことをしているのか。

だれがその権威を与えたのか。』

詳しくお話する暇はありません。省略せざるを得ませんが、結局、このことなのです。

イエスさまの教えによって、彼らの権威に傷が付くのです。

▼マタイ福音書6章、主の山上の説教に描かれる偽善者に重なると思えます。同じく、23章に重なると考えます。

5～7節。

『そのすることは、すべて人に見せるためである。

聖句の入った小箱を大きくしたり、衣服の房を長くしたりする。

6:宴会では上座、会堂では上席に座ることを好み、

7:また、広場で挨拶されたり、『先生』と呼ばれたりすることを好む。』

▼彼らだって、何かしら信仰的な思いがあって、聖職者に、或いは聖書の専門家になったのだと思えます。それとも、家業を継いだけでしょうか。

私たちだって同じことです。何時の間にか、魂の救い、永遠の命、といった必死のことを忘れて、形式的なこと、些末なことに気持ちを奪われるならば、何時の間にか、祭司長、長老たちのようになってしまうのです。

つまり、復活を否定する者になってしまうのです。

復活などどうでも良い、もっと大事なことがある、もっと緊急のことがあると考えるようになってしまうのです。

或いは逆でしょうか。復活などどうでも良い、つまり、信仰に核心部分がないから、形式的なこと、些末なことに気持ちを奪われるのです。